

## 中学校 国語科学習指導案

指導者 西原 利典

日 時	令和7年7月11日（金） 第3限 10:45～11:35
場 所	多目的教室
学年・組	中学校2年B組 40人
単 元	「ヒロシマ」を伝えるルポルタージュを書いて発表しよう
目 標	<p>1 抽象的な概念を表す語句の量を増すとともに、類義語と対義語、同音異義語や多義的な意味を表す語句などについて理解し、話や文章の中で使うことを通して、語感を磨き語彙を豊かにすることができる。(知識及び技能(1)エ)</p> <p>2 文章を読んで理解したことや考えたことを知識や経験と結び付け、自分の考えを広げたり深めたりすることができる。(思考力、判断力、表現力C読むことオ)</p> <p>3 文章全体と部分との関係に注意しながら、主張と例示との関係や登場人物の設定の仕方などを捉えることができる。(思考力、判断力、表現力C読むことア)</p> <p>4 言葉がもつ価値を認識するとともに、読書を生活に役立て、我が国の言語文化を大切にして、思いや考えを伝え合おうとする。(学びに向かう力、人間性等)</p>

### 指導計画（全5時間）

第1次：創立120周年記念ピースフォーラム「被爆ピアノ」の演奏を振り返る。(0.5時間)

第2次：教科書教材「壁に残された伝言」を読む。(2.5時間)

第1時 文章の全体と部分との関係に着目して読む。(0.5時間)

第2時 「被爆の伝言」が残ったメカニズムを理解する。(1時間)

第3時 「涙が出た」筆者の思いを読み取る。(1時間)【本時】

第3次：「被爆ピアノ」についてルポルタージュを書く。発表する。(2時間)

### 授業について

本校は今年創立120周年を迎え、記念行事として同窓会による「ピースフォーラム」が開催された。その中で「被爆ピアノ」の演奏があり全校生徒が鑑賞した。中学2年生は何を受け取り、何を感じ、何を考えたのだろうか。

本単元で使用する教材「壁に残された伝言」は1999年春に広島市袋町小学校で見つかった「被爆の伝言」についてのルポルタージュであり、2003年に集英社新書「ヒロシマ―壁に残された伝言」として出版されたものの一部である。

「広島」の「あの日」を思い浮かべることが不可能だった筆者が、取材を通して「涙が出た」という思いに至るまでの過程を説明している文章である。その本文の中で「被爆の伝言」が残ったメカニズムについて科学的、客観的事実の説明を行っている。

「文字の痕跡」としか見ることができなかった原爆の『遺物』を前に、「あの日」を思い浮かべられない筆者。しかしながら少しずつ「事実」が解き明かされて、一つ一つの物事に真摯な態度で向かい合い、その時々取材の中でとまどいながら考えを深めていき、そして最後は『遺産』と表現した筆者。筆者の流した「涙」を、学習者は果たして共感できるだろうか。

何気なく聴いた（聴かされた）「被爆ピアノ」に対する初発の印象・感想が、調査・探究を通して「事実」を積み上げることで認識が変容（深化・拡充）し、「被爆ピアノ」を通して「あの日」を「想像」することができることを期待したい。その活動を踏まえて筆者の「思い」を実感的に理解することができるのではないだろうか。できれば互いに発表し合う活動も入れて単元全体で「読む・書く・聞く・話す」力を総合的に鍛えていきたい。

## 題 目 「涙」のわけ

### 本時の目標

1. 「あの日」から五十数年後に「被爆の伝言」が発見されたことに対して、筆者がどのような意味を見出しているのか読み取る。(思考力、判断力、表現力)
2. 本文の表現を押さえながら「被爆の伝言」に対する筆者の受け止め方の変容を読み取る。(思考力、判断力、表現力等)
3. 証言や記憶を表現することで、「他人ごと」から「自分ごと」へと引き寄せる働きがあることを理解する。(学びに向かう力、人間性等)

### 本時の評価規準（観点／方法）

1. 「あの日」から五十数年後に「被爆の伝言」が発見されたことに対して、筆者がどのような意味を見出しているのか読み取ることができた。(思考、判断)／観察
2. 「被爆の伝言」に対する筆者の受け止め方の変容を読み取ることができた。(思考・判断・表現)／観察
3. 証言や記憶を表現することで、「他人ごと」から「自分ごと」へと引き寄せる働きがあることを理解できた。(学びに向かう力)／観察

### 本時の学習指導過程

学習内容	指導上の留意点	評価の観点と方法
<p>〈導入〉</p> <p>1.本文「五十数年という時間」の段を読み取る。 (5分)</p> <p>〈展開〉</p> <p>2.「無限に連鎖する『あの日』」の段を読み取る。(30分)</p> <p>〈まとめ〉</p> <p>3.「伝言」の意味を考える。</p> <p>4.次時の予告を聴く。</p>	<p>1.①「五十数年」とは何の時間かを確認する。 ②そのことを筆者はどのように評価しているかを 読み取らせる。 ・「戦後すぐ」に発見された場合と比較させる。</p> <p>2.①筆者の変容を指摘させる。 ・「被爆の伝言」についての表現が「遺物」から 「遺産」に変化していることに気づかせる。 ②なぜそうなったかを読み取らせる。 ・「家族などの関係者」が流した涙を筆者はど のように受け止めたかを考えさせる。 ③「無限の連鎖」とは具体的にどういうことか考 えさせる。 ・「今も続いている」の「今」とはいつかを考 えさせる。 ④自分は共感できるか考えさせる。 ・「共感できない、しがたい」という返答を期待 する。</p> <p>3.「被爆の伝言」とは当時の被災者が家族知人 に宛てた伝言であると同時に、現在から未来へ と語り継がれていくものという意味があるこ とを理解させる。</p>	<p>1.「あの日」から五十数 年後に「被爆の伝 言」が発見されたこ とに対して、筆者が どのような意味を見 出しているのか読み 取ろうとしている。 (観察)</p> <p>2.「被爆の伝言」に対 する筆者の受け止 め方の変容とその 理由を読み取ること ができた。(観察)</p> <p>3.積極的に考えようと している。(観察)</p>

**備考** 参考文献『核時代の想像力』大江健三郎（1970年 新調選書）

【板書計画】

第1時

「壁に残された伝言」(1) 井上恭介  
(二〇〇三年集英社新書)  
筆者〓放送ディレクター、北海道出身  
「あの日」一九四五年八月六日  
＝  
原爆で一面焼け野原・地獄のような光景  
→  
今、思い浮かべることができるか  
筆者〓不可能↓取材「伝言」との出会い

【剥がれ落ちた壁の下から】  
一九九九年春 袋町小学校  
「被爆の伝言」の一部発見  
・点検中に剥がれた  
・原爆直後に撮った写真があった  
・写真の存在を多くの人が知っていた  
↓いくつもの偶然  
**奇跡的な発見**

【白黒逆転のメカニズム】  
**奇跡的**  
〈保存の条件〉  
第一 煤の上に白チョークで書かれた  
第二 伝言がある期間放置された  
〈逆転のメカニズム〉  
・白いチョークは目立たないので残った  
・チョークが煤を保護した  
←  
上塗りした壁がチョークと一緒に剥がれ、  
煤の部分が黒い文字で残った

第2時

「壁に残された伝言」(2)  
井上恭介(当時35歳)  
＝  
【五十数年という時間】(考えさせられた)  
「あの日」から「被爆の伝言」  
が発見された一九九九年まで  
風化 ○  
⇔ 被爆体験 反響 ×  
戦後すぐ なまなましい

【無現に連鎖する「あの日」】  
＝今も続いている「伝言」  
筆者 ↓ 関係ない人々 ↓  
途方に暮れた遺物  
他人こと  
口をつぐむ  
立ちつくす  
自分こと  
「涙」想像・共感  
遺産  
壁に残された文字

「ああそうだったのか」〈涙〉  
家族を探す必死さ、絆の強さ  
現実のものとして感じた、衝撃  
家族ら関係者

# 壁に残された伝言

井上 恭介



- ◎ 文章を読んで理解したことや考えたことを知識や経験と結びつけ、**自分の考**えを広げたり深めたりする。
- 文章の全体と部分との関係に着目して読み、内容を理解する。

あなたは今、広島の高踏に立って、半世紀以上も前の「あの日」を思い浮かべることができらるだろうか。原爆で辺り一面焼け野原になり、地獄のような光景が広がっていたことを想像できるだろうか。東京から転勤で広島に赴任した私には不可能だった。私は赴任直後から、次の年の八月六日の原爆の日に放送する特別番組を作るために、「あの日」をたどる取材を始めた。被爆者の話や姿、被爆直後の写真、資料館に展示されている黒焦げの弁当箱やぼろの衣服。そのような断片を自分の中で貼り合わせてみたものの、それが本当にあの日の広島なのか、とうてい自信はもてなかった。

そのような中で出会ったのが「伝言」だった。

## 剥がれ落ちた壁の下から

広島市の中心部にある袋町小学校。すっきりと立つ長方形の白い鉄筋コンクリートの校舎。その壁の下に「被爆の伝言」の一部が見つかったのは、一九九九年春のことだった。校舎の建て替え工事に先立つ壁の点検中、階段近くの壁が偶然剥がれ、その下から文字らしきものが現れたの

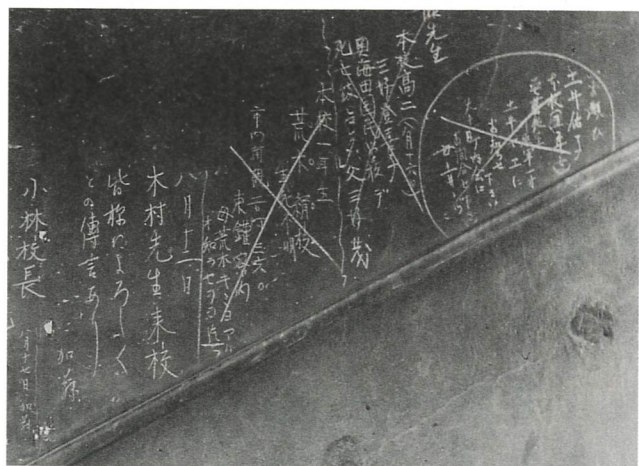
だ。よく見ると「寮内」という字が読めた。

「字の痕跡」としかいえないようなものが「読めた」のには理由があった。原爆の直後にこの壁を撮った写真があることを多くの人が知っていたからだ。東京の写真家が撮影し、しばらくの間、広島平和記念資料館（原爆資料館）にも展示されていたその写真には、階段近くの壁一面に書かれた伝言が写されていた。だから文字らしきものが見つかったとき、関係者は「ひょっとしてあれではないか。」と思ったのだ。

写真に写っている文章の中身や、階段の手すりや壁の位置関係などを細かく見比べると、確かにそれは、ある人の連絡先として記した「東鐘寮内」の一部だった。

もし壁が剥がれなかったら。もし写真が撮られていなかったら。写真は撮られていてもみんなが知るものでなかったら。そう考えると、実にいくつもの偶然が重なって、奇跡的に伝言が発見されたことがわかる。しかし、それだけではなかった。壁の下に文字が保存された事情もまた奇跡的だったのである。

実は、見つかった文字には、資料館に展示された写真の文字と一致しないことが一つだけあった。文字の色である。写真の文



壁一面に書かれた伝言の一部  
(1945年10月 菊池俊吉氏撮影)



壁が剥がれて現れた「寮内」の文字の痕跡

- 右11 漢 建て替え
- 左1 漢 寮内
- 左2 漢 痕跡
- 左19 漢 一致
- 右6 意 断片↓類 されはし
- 右3 意 赴任↓類 転任
- 右1 意 雑踏↓類 人ごみ

- 右2 漢 地獄
- 右4 漢 被爆
- 右9 漢 剥がれ落ちる
- 左9 【東鐘寮内】「東鐘」は、缶を製造する企業名の略。
- 左4 【広島平和記念資料館】一九五五年、広島市中区に開館。被爆者の遺品や被爆の状況を示した写真・資料などを展示・紹介している。
- 右4 【被爆者】原子爆弾の発する熱線や放射能を浴びた人。
- 左9 【広島平和記念資料館】一九五五年、広島市中区に開館。被爆者の遺品や被爆の状況を示した写真・資料などを展示・紹介している。
- 右2 【原爆】原子爆弾。ウランやプルトニウムなどが核分裂を起こすときに発生する膨大なエネルギーを利用した爆弾。



字は白い。当時の状況を鑑みれば、伝言が、黒く煤けた壁に白いチョークで書かれたものであることは明らかだ。ところが見つかった文字は黒かった。壁の下の文字は、どのように保存され、またどういった事情で白黒逆転して現れたのだろうか。

### 白黒逆転のメカニズム

一九四五年八月六日午前八時十五分、広島に原子爆弾が投下されて、市の中心部は一瞬にして破壊された。そしてすさまじい炎が町を覆った。市内の建物のほとんどを占める木造建築はことごとく焼きつくされた。

伝言が見つかった広島市立袋町国民学校西校舎は、鉄筋コンクリート三階建て。爆心地から僅か四百六十メートルの地点にあって、辛うじて焼け残った。付近に残った建物は数えるほどしかない。西校舎は、一九三六年に建てられた、最新の設備を誇る建物だった。地上三階地下一階、水洗トイレ完備のモダンな建物は、当時通っていた子供たちの自慢だったという。

鉄の窓枠は校庭に吹き飛ばされ、床や黒板や壁の木材は焼き払われたので、残ったのは「打ちっぱなし」のコンクリート部分だけだった。

しかし、雨露を防げる建物はなにしろ貴重だったから、校舎は原爆が落とされた直後から臨時の救護所となった。重傷を負った人たちが次々と運び込まれた。横たわる人の中に知り合いないか。探している人に関する情報はないか。行方知れずの人の消息を求めて多くの人が訪れたと考えられる。

このとき、校舎の中の壁は、廊下や壁に貼られていた松の板材が焼けたときの煤で真っ黒になっていた。そして、床にはチョークが転がっていた。伝言が、凹凸の少ない、真っ黒なコンク

リートの壁面を黒板代わりにして、白いチョークで書かれたこと。これが、伝言が保存されることになった第一の「条件」だったと専門家は指摘する。

更に「条件」が重なる。伝言の文字は、書かれたあと校舎が補修されるまでの間、そのまま放置された。書いた人の気持ちを考えれば、消してしまうには忍びなかったのかもしれない。

ところで、黒板の端に書かれたままの「日直」という文字などが、年度の変わりめに消そうとすると、いくらこすっても消えなかったという経験はないだろうか。チョークは、書いてすぐなら少し触っただけでも消えてしまうのに、しばらく置いておくと消せなくなる。これは、チョークの主成分（硫酸カルシウム）が、空気中の水分を吸って変質するからだ。

戦後、校舎の補修で壁が塗り直された時期は定かでない。早くても、校舎で授業を再開するために救護所が閉じられた一九四五年の十一月以降である。少なくとも放置期間は数か月以上。チョークが固まるのに十分な時間がたったことになる。チョークの伝言がある期間放置されたこと。これが、伝言が保存されることになった第二の「条件」である。

では、補修はどのように行われたか。古い壁の上に新しい壁を塗る場合、ふつうは新しい漆喰ののりがよくなるよう、いったん壁を洗い流してから塗るそうだが、ただ、壁を洗い流すといっても、こびりついたチョークをそぎ落とすにはかなり手間がかかる。しかもついているチョークは白いから、煤を洗い流して白くなつた壁の中ではそれほど目立たない。少し盛り上がりつつあるだけで、塗り直しにもほとんど支障がない。こうした事情が重なって、チョークは壁に残ったのである。

右4 【メカニズム】しくみ。仕掛け。  
右8 【国民学校】一九四一年に、それまで尋常小学校と呼ばれていた初等教育の学校を改称したものの。一九四七年からは小学校と呼ばれることになり、現在に至る。

右11 【モダンな】（その当時として）現代的な。

右12 【打ちっぱなし】コンクリートの表面に仕上げを行わずに、そのまま仕上げ面とすること。

左8 【硫酸カルシウム】焼き石こうとも呼ばれる物質。水を加えると固まる。

左15 【漆喰】壁を塗る材料。石灰に粘土を加え、ふのりを溶かした液体で練ったもの。

右6 漢 炎

右12 漢 焼き払われる

右14 漢 雨露

右18 漢 廊下

左8 漢 硫酸

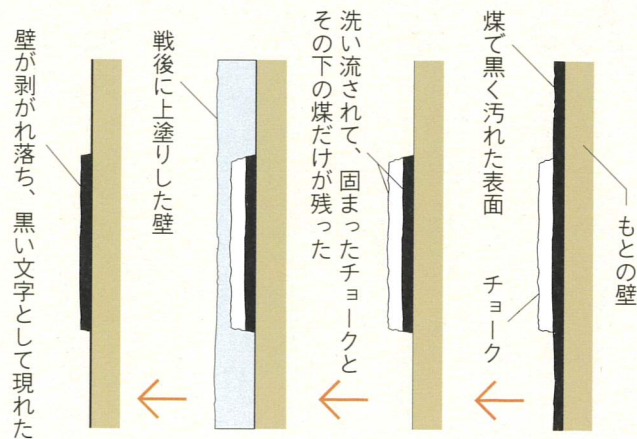
右1 意 鑑みる

右6 意 ことごとく

↓ 類 すっかり

右9 意 辛うじて ↓ 類 辛くも

左4 意 忍びない



チョークで書かれた跡が黒い文字として現れたメカニズム



ここで注目すべき点は、チョークが残った部分の「チョークの下の壁」は黒いということだ。五十数年間、チョークが壁の煤を、その部分だけ保護したことになる。文字が黒かったのは、チョークで書かれた文字によって守られていた煤が現れたからだ。ちなみにチョークそのものは、剥がれ落ちた壁にくっついて取り除かれた。これが、チョークで書かれた伝言が保存され、白黒逆転して現れたメカニズムだ。

#### 五十数年という時間

「被爆の伝言」が発見された年の夏、新聞、テレビなどのマスコミは、この話題を大きく取り上げた。報道をきっかけに「あの日」以来会えずにいた、伝言を書いた教師と、伝言に書かれた教え子が五十数年ぶりに再会するというニュースが話を更に盛り上げた。建物そのものの永久保存を訴える声、他にもまだひっそりと眠っている伝言があるのではないかと声がわきあがった。このような反響を受け、校舎の建て替え計画は変更され、校舎の一部保存と、伝言を見つけるための調査を行うことが決定された。戦後に塗られた壁を剥がして、文字を探すという前代未聞の調査である。

詳細な調査の結果、新たに文字が見つかったのは、最初の場所の近くにもう一か所。板壁を上から貼ったところで数か所。そのうち伝言がまとまって見つかったのは、一か所だけだった。

これを多いとみるか、少ないとみるか。伝言を校舎のあちこちで見たと記憶していた人にすれば、もっとあったはずだという思いは強いだろう。しかし、もともと全て失われていたと考えられてきたことを思えば、成果は大きかったとみてよいのではないか。

考えさせられたのは、発見された伝言が多いか少ないかということよりも、それらの伝言が五

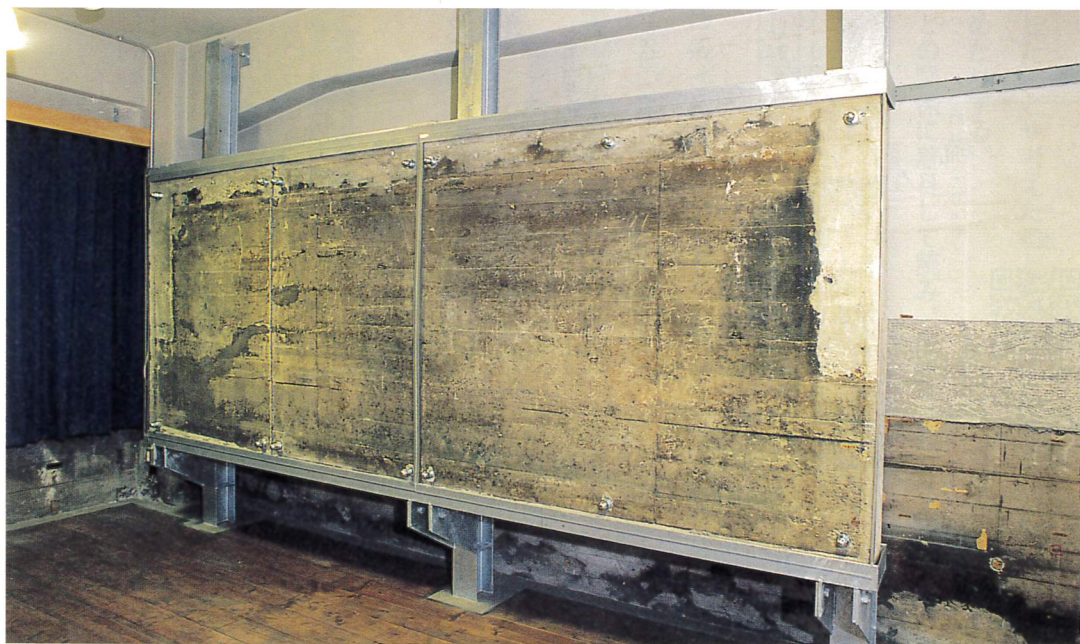
十数年という時間を超えて出てきたことの意味だった。

もし戦後すぐに見つかったとしたらどうであっただろう。あの日をなまなしく語れる被爆者がおおぜいいて、被爆した建物や遺跡もまだ市内のあちこちに残っていたときなら、これほど大きな反響を呼ばなかったのではないか。市内に残る被爆建物が僅かになり、被爆体験の風化が叫ばれる二十世紀の終わりだったからこそ、これほど注目されたのだ。

#### 無限に連鎖する「あの日」

原爆の直後、愛する人の行方がわからず、必死で探す人が書いた伝言の文字には、何が写されているのか。発見された伝言を取材者として初めて見たとき、私は正直途方にくれた。貴重な原爆の遺物であるという意味で迫力を感じた。だが、何が書いてあるのか文字を追うのさえ容易ではない。どこからどこまでが一つの伝言なのかわからない。名前はいくつか読めるが、書いた人の名前なのか、探している人の名前なのかわからない。その人がその後どうしたのかはもちろんわからない。

しかし、取材が進み、家族などの関係者が見つかって、彼らと一緒に書かれた文字の前に立ったとき、驚くべきことが起こった。彼らはいとも簡単にそのかすれた文字を読み、「ああそうだったのか。」とつ



「伝言文字」が書かれている壁  
現在、袋町小学校平和資料館に保存されている。

左6 意風化  
左2 意なまなましい  
右12 意前代未聞→類未曾有





## 実践上の留意点

### 1. 授業説明

文章を読んでその内容をどれだけ実感的に理解できるか？具体的には本教材において「壁に残された伝言」（文字）を見て涙を流した筆者の思いにどこまで迫れるかをねらいとした授業であった。

今年は被爆 80 年にあたる。広島市では毎年 8 月 6 日に平和記念式典が開かれ、市内の小学生は 5 年生で全員「平和への誓い」を書き（書かされ）その中から代表者 2 名が選ばれ、6 年生で平和記念式典の中で読み上げる。風化させないという取り組みの一つである。本校の中学生もおおむねこの活動を経験している。それでも本文教材との隔たりは大きいと感じる。本授業の最後に「自分は筆者に共感できるか」を考えさせ、「共感できる」という優等生の答えではなく、「共感できない、しがたい」という本音を引き出したかったが、板書の量が多く、時間が足りなくなりこの発問はできずじまいとなった。

筆者はなぜ涙を流したのか？それまで筆者は「被爆者の話や姿、被爆直後の写真、資料館に展示されている黒焦げの弁当箱やぼろぼろの衣服。そのような断片を自分の中で貼り合わせてみたものの、それが本当にあの日の広島なのか、とうてい自信はもてなかった。」と述べている。それが最後に「家族などの関係者が見つかって、彼らと一緒に書かれた文字の前に立ったとき、驚くべきことが起こった。彼らはいとも簡単にそのかすれた文字を読み、『ああそうだったのか。』とつぶやいた。そして涙を流した。それを横で聞きながら私は、もう一度、その文字を眺めた。涙が出た。」と述べている。前者と後者の違いは何か？「文字」であること。そして「伝言」であること。誰かに何かを伝えたい、書いた人の相手に対する思いが込められ、受け取る人がいることで「伝言」は成立する。受け取った人はそこに生きた人間を見て、感じて心が揺さぶられる。文字には、言葉にはそんな力があるのだ、ということを学んでほしいと切に願った。

このことは言葉によるコミュニケーションの基本的な機能である。SNS などで言葉を簡単に発信できる環境にある学習者にとって、「伝える」ことと同じくらい「受け取る」ことの大切さを考えさせたいと思うが、授業の実際にはそこまで至らなかった。

### 2. 研究協議

研究協議において、「涙」にこだわらない方がいいのではないかという意見が出た。筆者がどういう心情であったかを問うのは難しい、学習者は表面上読み取っても、筆者に共感することはできない、という理由である。この教材では、筆者への共感を求めるのではなく、少し距離を置いて『『伝わる』とはどういうことか』、「伝わったものは何か」を考えさせるほうが指導として適しているのではないか、との指摘があった。

また、筆者自身も体験していないことをどのように後世に伝えていこうとしているのか、その書きぶりにも着目することも国語科の重要な学習課題として成り立つのではないか。戦争や被爆を体験した方はかえって「ヒロシマ」を語りにくい、語ろうとしない。体験していない世代がどう語り継ぐのか、記憶を継承していくのか、伝え方、語り方を意識させ、身に付けさせることも大切である。そのことは古典が今の自分たちにどうかかわるのかにも通じるものと思われる。